

八ッ場ダム住民訴訟通信-125

2017年5月5日発行

捏造された？ 昨年(2016年)の利根川渇水騒動。

田植えの季節がきました。思いだすのは昨年の利根川の渇水騒ぎ。なぜか今でも「節水にご協力を」の張り紙が色あせたまま残されています。でも、私たちの生活に何か影響があったのでしょうか。節水することはどんな状況にあっても正しいことです。しかし、ダムをつくる国や水道事業者である県や市町村が自ら渇水をつくり出し、最終利用者であり、納税者である住民を脅すことは許されるものではありません。

見えてきた、利水基準点の過大な正常流量と、ダムの過剰放流。

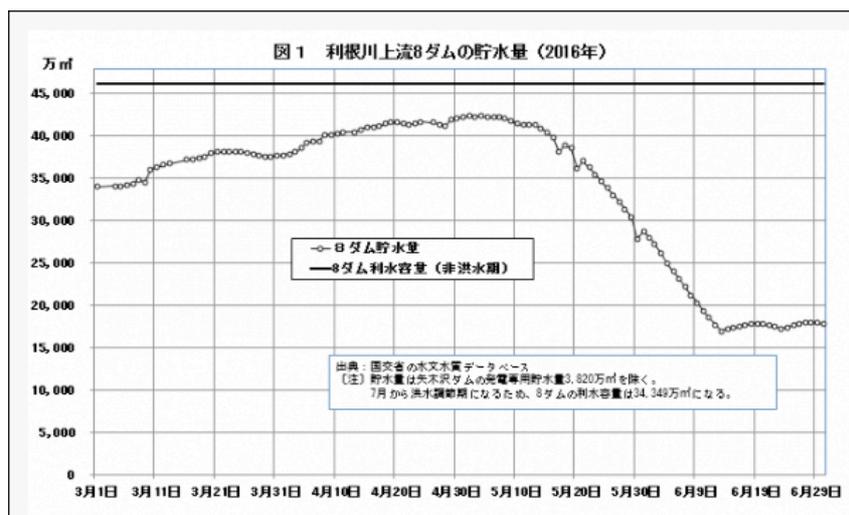
昨年6月7日、国土交通省は八木沢ダムなど利根川上流ダム群の貯水量が49%を割った



として、10%の取水制限に入らざるを得ないと発表しました。理由は冬季の雪不足。テレビや新聞は一斉に干上がったダムの姿を報じました。こんな報道に接すれば誰でも危機感を持つのは当然です。しかし水問題研究家の嶋津暉之さんは、ダム貯水量の減少の一番の原因はダムの過剰放流にあると言います。以下嶋津さんの分析データを基に記します。

ダムマニアのための観光放流。八木沢ダム HP より

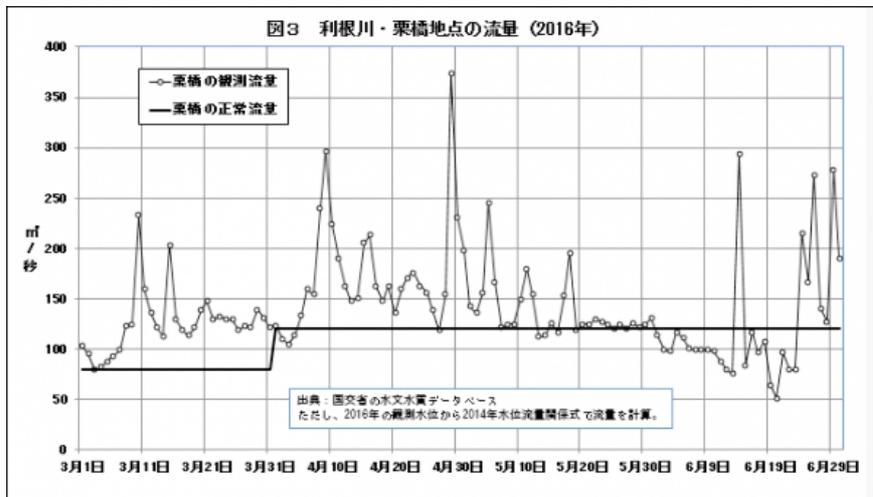
断はダムが干上がったか否かではありません。利根川に必要な水量が流れているか否かにあります。そのため利根川には利水基



準点なるものが埼玉県の大栗橋に設けられています。ここでは利根川の流量を常時観測し、季節により変動する水需要に応えるため上流にある8ダムの貯水量をコントロール。利根川に必要な水量を補給しているのです。例えば、最も水利用が大きくなる灌漑期(概ね4月～9月)には毎秒120トン

を正常流量としています。問題はこの“正常流量”が妥当なのか否かです。では、実際にダムからの補給量と栗橋地点の流量を見てみましょう。上のグラフは利根川上流8ダムの貯水容量の推移です。確かに5月10日過ぎから放流が始まり貯水量が減って行くのが分かり

ます。紙面の都合上グラフで表せませんが、5月当初は毎秒50トン程度の補給から、6月に入ると110トン程度まで増大しています。つまり形通りにダムから放流し利根川に補給されていたことが分かります。では、肝心の栗橋地点での流量を確認してみましょう。

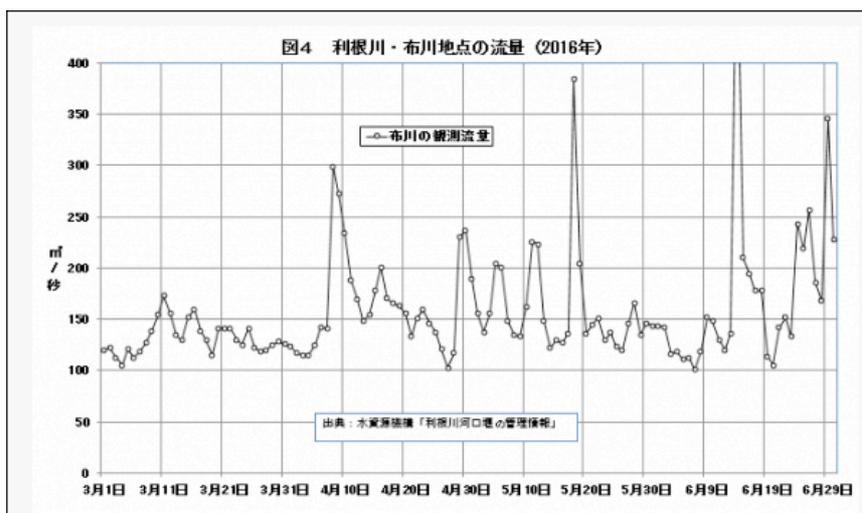


グラフの中央よりやや下の太い実線が正常流量を示します。目をひくのは、6月の一時期を除いて、それをはるかに上回る水量が補給されており、需要期前の3月にも過大な水量が補給されていることです。

国は渇水の原因を雪不足によるものとしていました。ならば、最大需要期を前にこの過大な補給量をどう説明するのでしょうか。愚考ですが、国が渇水を公表したのが6月7日。だとすると、グラフから見えてくるのは、それまでの過剰放流に気が慌ててブレーキを踏んだのではないか、ということです。前後の乱高下からも慌てぶりが手に取るように分かります。

栗橋だけではない。中流も下流もたっぷりと流れていた。

改めて栗橋が利水基準点である理由を確認してみましょう。栗橋は利根川の中流部に位置し、上流には利根大堰があります。利根大堰は、東京都と埼玉県の水道用水と工業用水、埼玉県の農業用水など最大で毎秒108トンも取水する利根川最大の取水堰です。栗橋地点での正常流量の正常とは、主に茨城県と千葉県の水需要に対応するための維持水量と言っているでしょう。※国の「水収支」では、栗橋で120トン確保し、最下流の利根川河口堰で30トン確保。中・下流で90トン確保するとしています。



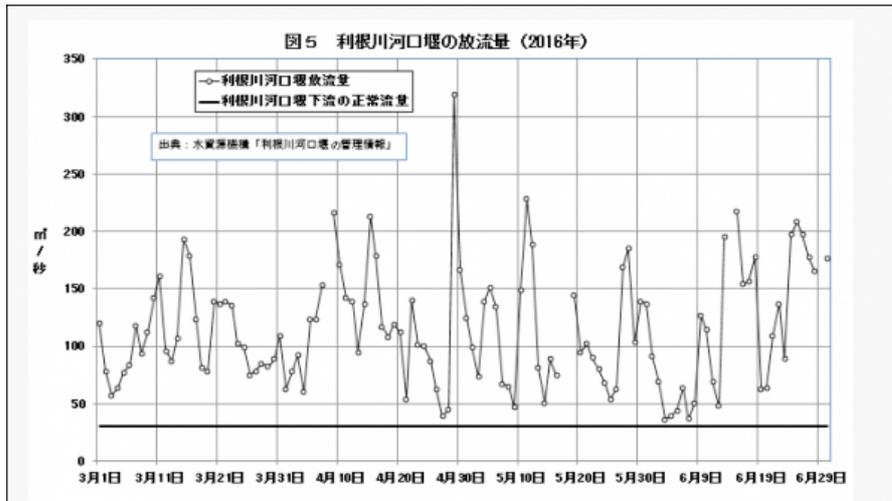
で、あるならば、中・下流部の流量が気になります。茨城県の布川の流量を見てみましょう。左のグラフがそれになります。ご覧のように安定水量というべき毎秒90トン大幅に上回る水量が確保されています。時には300~400トンを超える流量も

見てとれます。渇水のカの字はどこに有るのでしょうか。何故こんなことが起きるのか。それはズバリ、栗橋の正常流量なるものが、支流河川からの流量を低く見積もっているから

です。栗橋で言えば、利根大堰の下流には渡良瀬川が流れこんでいます。思川、巴波(うずま)川などを集めて流れる大河川です。布川の上流には鬼怒川と小貝川が合流しています。いずれも豊富な水量を利根川に注いでいます。では、最下流の利根河口堰の流量を見てみましょう。

利根河口堰では、正常流量の2倍以上の水が海に流されていた。

利根河口堰の主たる目的は、佐原市など利根川下流に位置する水道を塩害から守ることにあります。だから河口堰が出来るまでは、上流からの相当量の流量で上げ潮の遡上を防いでいたのですが、堰が出来てからはその必要も激減。現在は正常流量を毎秒30トンとしています。



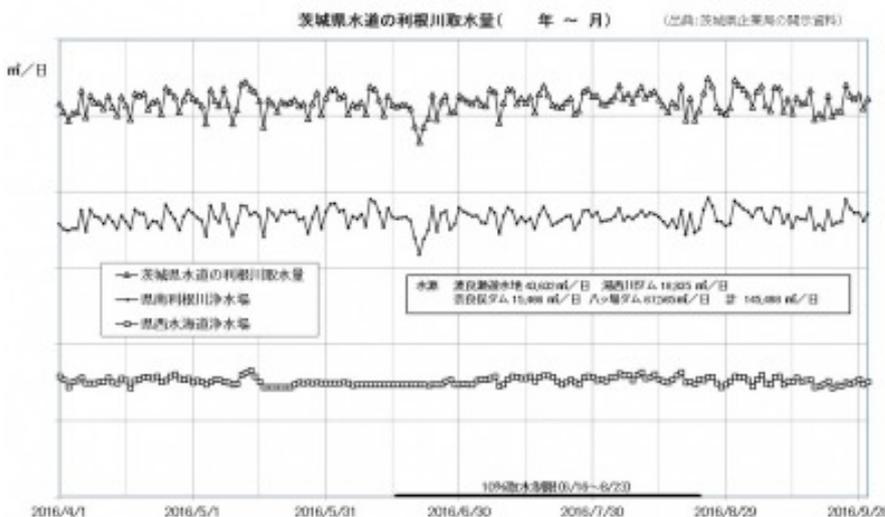
堰が出来てからはその必要も激減。現在は正常流量を毎秒30トンとしています。

左のグラフをご覧ください。グラフの下段にある実線が正常流量の30トンです。でも現実には平均で約80トンの流量が記録されています。利根河口堰の下は海しかありません。この過剰に流された“大切な水”は約50トン。ただただ海に流されたのです。

は平均で約80トンの流量が記録されています。利根河口堰の下は海しかありません。この過剰に流された“大切な水”は約50トン。ただただ海に流されたのです。

渇水・取水制限の大号令のもと、茨城県は何事もなく取水していた。

さて、茨城県の話です。利根川に取水制限の大号令が下れば、取手市にある県南浄水場からの取水に制限がかかります。これが「上命下服」お上の掟です。ところが茨城県はビビルところか、平然と例年どおり取水し続けていたのです。



平然と例年どおり取水し続けていたのです。グラフの上段の折れ線は利根川全体の取水量。中段が取手浄水場の取水量。下段が鬼怒川の水海道浄水場になります。中段の取手を見ますと。取水制限を実施した6月16日の直後は若干の変化があるものの、他は何時ものように粛々と取水しています。

編者の住む取手市では、取水制限の時期も利根川の水は滔々と流れていました。しかし、取手駅東口にある関東地方整備局の電光掲示板は、取水制限の解除された後も、「節水にご協力」の

文字が赤々と記されていました。

実は出来レース？

ハッ場ダム基本計画変更の理由説明にも利用されました。

昨年(2016年)8月12日、国土交通省はハッ場ダムの総事業費を4600億円から5320億円へと増額する「ハッ場ダム基本計画の変更」を発表しました。それを受けて各都県の議会では質疑が行われ、そしてこの濁水が利用されました。茨城県議会でもぬかりなく…。

茨城県議会 2016年9月第3回定例会議事録から抜粋

■上野高志議員(日本共産党)の質問

…ハッ場ダムによる本県の水利権は日量約9万トンです。今でも46万トン余っており、撤退しても何の支障もありません。720億円に及ぶ事業費増額に同意せず、ハッ場ダム事業から撤退すべきです。知事の所見を伺います。

■橋本知事の答弁

…本事業の必要性でございますが、ハッ場ダムは県南西地域における水道水の重要な水源となっており、既にダム完成を前提に暫定水利権を取得して、8市2町に給水しているところであります。

また、ことしは近年にない早い時期から取水制限が実施されましたが、国では、過去の濁水に対するハッ場ダムの効果についてシミュレーションを実施しており、冬と夏を合わせ117日間にも及ぶ取水制限が実施された平成8年を例にとりますと、ハッ場ダムが完成すれば、取水制限日数が100日減少し17日間になると試算されるなど、濁水に対する効果が期待されるところであります。

妄想、いや整理するとこうなります。

- 1.2016年8月にはハッ場ダム基本計画の変更を発表することとなった。
- 2.しかし、事業費が4600億円から5320億円に増額するには納得させる環境が必要。
- 3.だから、発表に先立ち濁水の危機を表明。取水制限をする。
- 4.危機感が行き渡ったところで基本計画の変更を表明。
- 5.しかし、都県には取水制限は「ポーズだけでいい」と裏で手を握る。
- 6.県議会での質疑には濁水を強調して反対意見を封じる。

ハッ場ダムの現地「川原湯温泉」は見捨てられた?!

本年3月、JRのダイヤ改定で、これまで「川原湯温泉駅」に停車していた「特急草津」が停まらなくなりました。特急草津は川原湯温泉へ行く最後とも言える交通手段でした。最後とも…と言うのは、数年前に付け替え国道が完成した時、JR高速バス「上州ゆけむり号」が川原湯温泉をスキップしていたからです。JR吾妻線の付け替えはすべてハッ場ダム事業費で賄われ、川原湯の人々には素晴らしい駅舎がつくられ、国道と繋がる巨大な橋が2本も架けられました。でもバスも特急も停まらなければ息の根が止まります。かつてハッ場ダム反対闘争の先頭に立っていたことへの報復でしょうか。いかにJRが民営化したと言え許されるものではありません。現地の人々はまた棄てられたのでしょうか。

ハッ場ダムをストップさせる茨城の会 代表:濱田篤信 船津寛

事務局:神原禮二 〒302-0023 取手市白山 1-8-5 携帯:090-4527-7768